
蝶憑き 聞こえない歌

小都吹片瀬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蝶憑き 聞こえない歌

【Nコード】

N2860Z

【作者名】

小都吹片瀬

【あらすじ】

蝶が飛んでるね。

きつと探しているんだね…

契約者を

「時間」をカゲロウに願った少年、カゲル。

「才能」をアゲハに願った人気歌手、アマネ。

最年少として組織に所属して10年。

その日はなんの変哲も無かった。

テレビをつけたら人気歌手の引退報道がやっていたぐらいしか覚えていない。

平和だったその日、ある電話がかかってきた。

組織からの召集命令。

組織の拠点に行くところには、引退報道で時の人となっている人気歌手、Agehaの姿があった…

望みを叶えるために交わした契約を、果たしましょう。

今日も蝶が飛んでるね。

そうね、また、契約を結ぶのね…

プロローグ

蝶憑^{ちやうじ}き、ポゼッションって知ってる？

ごめん、知らない。

なんかね、渡せって言われたものをわたしたら願いを叶えてくれる蝶がいるんだって。それにとりつかれた人を言うんだって。

本当に？

うーん。わからない。都市伝説みたいなものかな？

そうなんだ。

カゲルくんも気をつけた方がいいんじゃない？

どうして？

だって、君の名前…

~~~~~

「時雨<sup>シグレ</sup>！起きろ！」

頭に衝撃が走った。

何かでたたかれたのだろうか？

顔を上げると見知らぬ中年の男が立っていた。

「だれ…？」

「俺はお前の担任だ。」

「担任…？」

「そっだ」

「ってなんだっけ？」

またさつきと同じように頭に衝撃が走った。

そういえばさつきから小さな笑い声と奇異の眼差しが俺に向けられているような気がする。

なんだったかな…？

「あ、思い出した。ここ学校か。」

「はあ…おい時雨<sup>しぐれ</sup>。顔洗うか、保健室行って寝るか、この問題に答えろ。」

担任は黒板を指して言った。

「保健室行って寝るのが一番ラクそうですね…と言いたいんですが保健室の場所はわからないし、顔洗おうにもタオルもってないんで問題に答えます…。」

小さな笑い声は大きな笑い声に変わった。

少しづるさいな…。

「お前、これ一応大学レベルの問題だぞ。高1に解けるか？」

担任が出題しておいて意地悪そうに俺を見てそう言う。

「1 2 3」

俺はボソツと答えだけ言って机に伏せた。

眠い…。

教室中がざわつく。

文句を言われないことから答えはあっていたんだと想像できる。

やっと眠れそうになったとき、チャイムが鳴った。

この学校はどうやら俺を寝かさない気らしい。

「じゃあ、数学はここまで。」

担任が逃げるように教室を出て行った。

それを見計らって何人ものクラスメイト達が俺のところ集まる。

「カゲルくん。すっごいね〜」

「俺も思った。お前頭いいんだな。」

そんなことを数々言っただの授業のチャイムまで俺の席の周りを囲んで話していた。

休み時間すら寝かせてくれないのか…。

もう限界だ…

~~~~~

俺はそのあと、何人もの先生の声を遠くで聞いている感覚になり、気がついたら放課後の教室だった。

あーだりー。

無気力な学園生活。

本当は学校なんか通いたくないんだけど、通わなかったらあの人がつるさいから…

そのとき、廊下を何人かが通る音が聞こえた。

「ええ！それやばいんじゃないの？蝶憑きって…」

「あの都市伝説のポゼッション？」

「うん。なんか、気づいたら蝶のあざが首にあって。」

歩いてきたのは派手な女子2人と髪をかきあげ、首を見せている控

えめそんな女子1人。

「生まれつきとかじゃないの？」

「それはないと思うんだけど…」

あった。

彼女の首には蝶のマーク、契約痕があった。

「それよりさ、今日ケーキ食べに行かない？」

「そうだね、京子は？」

京子と呼ばれたその子は髪を下ろして「行く」と答えて、足早に三人で遠くへ行ってしまった。

「京子ね…」

~~~~~

「おい〜やまもと〜ふざけんよ。」

朝、教室に入ったら女子が教室の隅にかたまっていた。

「山本がぶつかつたせいで、あたしのセーター汚れたんですけど〜」

「あはは、何それウケルー。」

女子特有のいじめというやつだろう。

一人の金髪の女の子が花瓶の水をかぶせられていた。

「里香りかちゃんあやまりなよ」

「てか学校くんなし」

周りにいる派手な外見の女子の中に一人地味な女の子、京子もまざっていた。

「京子も何かやっちゃいなよ」

「う…うん。」

京子が動いて髪が揺れたとき、隙間から蝶のあざが見えた。

昨日より大きくなっている。

そろそろ限界かな。

~~~~~

放課後、俺は京子を呼び出した。

薄暗い教室。

みんな帰ったあとに。

「時雨くん、話ってなに？」

京子はビクビクしながら俺を見ている。

「首のアザ、どう？」

俺は彼女の首を指差し言った。

「アザ…。知ってたんだね。」

「昨日廊下で話してたのが聞こえた。」

「そっか…。別に痛いとかじゃないし平気だよ。」

「…かは？」

「え？なに？」

「対価たいかは何を渡したの？山本里香やまもとりかさん？」

彼女はひどく驚いた様子で俺の目を見た。

「なんで？」

「なにが？」

「なんで私が山本だつてわかるの？」

取り乱す一歩手前の様な顔をしている。

「質問したのは俺。対価に何を渡したの？」

「私。対価で渡したのは山本里香。」

「願いは？」

「もっと可愛くて頭よくっていじめられない子になりたい。」

「叶った？」

「ううん、私は私のまま、そうなりたかったの。だけど、私はみんなからみたら、京子なんだって。」

彼女は自分を嘲笑うように微笑んだ。

「私は私に戻りたいよ。」

微笑んだ顔は崩れ、彼女は泣き出した。

「本当に戻りたいと願うなら叶えてあげてもいいよ。」

「え？」

顔を少し上げ彼女は俺を見た。

「あなたは？」

「俺は蝶憑き（ポゼッション）。」

「ポゼッション…？」

「ただいま対価を支払い中。君の願いをかなえて蝶は悪魔になった。」

俺はそれを討つ。」

「何言ってるのかわからないよ……。」

「大丈夫。どうせ、すぐ忘れるんだから。」

「え？」

俺は両手を勢いよく合わせた。

『カゲロウ！^{ケンゲン}顕現！』

手をゆっくり離し、現れた日本刀を右手で持つ。

「なに！！？」

彼女の首のアザに向かってすばやく振る。

「討伐。」

彼女の首の大きな蝶のアザは無数の小さな蝶になり飛んでいった。

「討伐完了」

~~~~~

「山本さん、一緒に科学室いかない？」

「うん。」

1週間前、私は教室で倒れているのを発見された。

そのとき同じクラスの田中京子さんも違う場所で倒れているのを発見されたらしい。

私も田中さんも何をしていたか覚えていなかった。

それから、なぜか私へのいじめはなくなり友人もできた。

少しは変わったのかな？

「あれ？」

「どうしたの山本さん。」

「今のこと？」

「ああ、カゲル君？」

「カゲルくん…？」

「やくね。同じクラスじゃない。時雨しぐれ陽蝶かげるくん。」

「そうよね、どうしたんだろ？」

~~~~~

どうして？

だって君の名前、陽蝶カゲルって蝶が入っているじゃない。

アゲハチヨウ

『大人気歌手 Ageha (16) 芸能界引退』

今日のテレビはどのチャンネルもその内容ばかりを放送していた。

土曜の朝のアニメをつぶしてまで放送するとは…。

Ageha、奇跡の歌声と称されるほどの実力を持っていて、世間に疎い俺でも知っている歌手だ。

結構好きだったんだけどな…。

そのとき机の上の携帯が震えた。

着信だ。サブディスプレイには“黄蝶”の文字。

「はい、時雨しぐれです。」

『カゲリーン、おっはよう。』

ブチッ。

無意識に電話を切ってしまった。

そしてまた携帯がなる。

「はい、時雨です。」

『ヒドイ！きらなくなつていいじゃない。』

「すみませんね黄蝶^{きりか}さん。それより、もう歳なんですから相応の対応をしていただきたいなと」

『まだ27よ！！！』

耳が痛い…。

「それで用件はなんですか？」

『あゝそうだった。時雨陽蝶^{しぐれかげる}、召集命令がかかりました。至急BD本部まで来なさい。以上。』

それだけ言うと27歳のオペレーターは電話を切った。

休日出勤かよ。

~~~~~  
B D B

国家機関、対悪魔作戦本部。

深く絶望したとき、蝶に望みをかなえてもらい、対価として戦うことを強いられた蝶憑き、通称ポゼッションが集まる組織。

年齢層はさまざまだが、深く絶望することが少ない分、若い人間は少ない。

最年少記録は6歳。

最年長記録は80歳とたくさんのポゼッションが集まっている。

一応給料ももらえる。

### 契約蝶

深く絶望した人間の望みを叶えてくれる蝶。

そのかわり対価が必要。

大抵の場合、自分が持っていることすら忘れているものを対価として受け取っているので、蝶の存在には気づかない。

ただし、望みが大きすぎた場合、対価として悪魔の討伐を強いられる。

そのとき必要物資として、各契約蝶ごとに武器や能力などがわたされる。

契約蝶は複数の契約は結べない。

契約した人間がポゼッションの場合は死、小さな願いだった場合は対価を支払い終わることを条件に次の契約へといける。

### 悪魔

望みをかなえてくれる蝶、けいやくちよう通称契約蝶を扮した偽者。

悪魔と契約をすると体のどこかに蝶のアザができる。

何者かが操っているとBDBはみている。

大きいものと戦闘するときには結界が必要。

蝶憑き

契約蝶に大きな望みを叶えてもらった人間。

何かしらの能力を授かっている。

悪魔を討つために生きている。

~~~~~  
~~~~~

「ここまでは大丈夫？」

俺がBDBの第4班の部屋へ行くと、先ほど俺に電話してきた黄蝶きりかさんと、俺と同じ年ぐらいの女の子がいた。

4班というのは俺が所属している班で班員は今のところ俺のみ。

俺だけのためにこの広い部屋に大きなソファァーでかいテレビを置い

ていた。

その大きなソファアに黄蝶さんとその女の子が座って話をしている。話の内容からして、俺がBDBに入るときに受けた講座みたいなものだとわかった。

そのとき黄蝶さんが部屋に入ってきた俺に気づき、顔を上げた。

「遅かったね陽蝶<sup>かひる</sup>。もう講座はじめちゃってるよ。」

「これでもいそいできたんですけどね。で、そちらさんは？」

俺は後ろを向いて座っている女の子を指差して黄蝶さんに聞いた。

「え？陽蝶知らないの？超有名人ジャン。ほらアマネ、自己紹介。」

アマネと呼ばれたその子は俺の方へ振り向いた。

「Ageha？」

その子の顔は見たことがあった。

いや、直接見たことは無い。

ただ、今日も見た。

テレビの中で…。

「なんだやっぱり知ってたか、そうAgeha。これからあんたの

班に入るから、ほら自己紹介って。」

Agehaは立ち上がり、俺に一礼すると口を開いた。

「歌代うたしろ亜蝶あまね。16歳。」

澄んでいる綺麗な声だった。

「そういうことだから、あとはよろしくね。」

黄蝶さんはそう言って立ち上がった。

「ちょ…黄蝶さん？それだけ!？」

「うーん。助けてあげたいけど班違うしまあ、頑張って。」

行ってしまった。

~~~~~

広い部屋に二人というのも気まずいものだ。

何か喋った方がいいよな。

「えっとアゲ…アマネさん？」

「名前。」

「?」

「私はあなたの名前知らない。」

表情を変えずあまね亜蝶さんは淡々と言った。

「ああ、俺はカゲル。時雨陽蝶。」

「カゲル？」

「そう。」

会話が途切れた…。

「気まずいよう…。」

「アマネ亜蝶さんは…。」

「アマネ。アマネでいい。」

呼び捨てにしてもいいと言っているのだろうか。

「アマネ？」

「何？」

「アマネは高校に行ってるの？」

大人に囲まれて生きてきた俺には、10代ばい会話というのがそれしか思いつかなかった。

「高校行ってない、月曜日から行けって。」

「誰が？」

「キリカ。」

ああ、BDBの命令か。

俺もなんだかんだでBDBに言われたから高校に通っている。

就職しない俺たちにとって高卒資格なんて正直必要ないのだが、大人達は高校は楽しいから行っとけって勝手に決められた。

「どこの高校に行くの？」

「みかつき三日月高校。」

そりゃそうか。

BDBが決めたのに俺と違うところなわけ無いか。

「俺も三日月なんだ。」

「そう。」

本当に会話が続かない。

どうしようかと考えていたそのとき、警報が鳴った。

『緊急召集。緊急召集。4班、しぐれかけ時雨陽蝶、うたしろあまね歌代亜蝶。至急司令室ま

で来い。』

「召集だって…」

「聞こえてる。」

亜蝶はそう言つとソファーから立ち上がりドアの法へ歩いていったかと思うと、振り返り俺を見てきた。

「何？」

「場所、わからない。」

「じゃあ、一緒に行くか？」

「うん。」

『4班！緊急だつて言ってるだろ。すぐ来い！』

放送がまた入った。

「いそごつか。」

「うん。」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「でた。」

「はい？」

俺と亜蝶が司令室に行くと、司令官のおっさんが唐突にそう言った。

「だからでたんだよ！」

今度はキレ気味だ。

「何がですか？」

「悪魔だよ！」

「そうですか。」

「そうですか、じゃない！今回の任務は悪魔討伐。かなり強力なものだから結界は必ず張るように。以上。」

悪魔討伐か、大変そうだな。

「カゲル。聞いてたか？」

司令官は俺の方かなりキレながら近づいてくる。

「聞いてましたけど？」

「聞いてたなら動け！ほら制服。」

俺は司令官にBDBの制服を渡された。

「ほら、お前も。」

亜蝶も女子用の制服を渡された。

「え…?」

「ホラ!とつとと着替えて倒して来い!」

「は?」

「は?じゃない!被害が出る前に逃げ!」

「ちょっと待ってください。悪魔討伐って誰がやるんですか?」

「バカかお前。4班に任務だって言ってるだろ。」

4班、つまり俺が悪魔を討伐?

めんどくさい…。

「じゃあ、行ってきます。亜蝶さんはテレビでも見てていいから。」

ボコッ。

「いってー!」

殴られた。親父にも…殴られたことはあるけど殴られた!

「何すんですか司令官!」

「歌代も4班だろ！」

「そういえば…」

「ホラ、二人仲良く討伐して来い！」

「了解…。」

「歌代！返事！」

「了解？」

~~~~~

「司令官、あの二人でよかったですか？」

カゲルとアマネが出て行った司令室でキリカと司令官が話していた。

「何がだ？」

「今回の悪魔はA A級だと聞いています。カゲル一人ならともかく…」

「これ、見てみるよ。」

司令官はキリカに一枚の紙を渡した。

「これってアマネとカゲルの…なるほど。あの二人ならできますね。」

「
だろ？」

~~~~~

俺とアマネは着替えるために自室、4班の部屋へ戻ってきた。

カーテンで部屋の真ん中を仕切って着替えている。

「アマネ……」

「何？」

カーテンの後から声が返ってきた。

「お前、怖くないの？」

「なんで？」

「いや、別に……」

「カゲルは怖いのか？」

「最初は怖かったけど、今は怖くないよ。慣れちゃったから……」

「カゲルはそんなにBDBが長いのか？」

「長いよ……それなりに……」

~~~~~  
~~~~~

「準備完了しました。」

俺とアマネが着替えて司令室にもどると、さっきまでいた黄蝶の姿が見えなくなっていた。

「遅い！次からは30秒で準備しろ。」

「はい。」

「そつだ、歌倉。」

司令官がアマネのほうに視線を送る。

「はい……」

「お前、空は飛べるか？」

「人類には無理かと……」

「能力でだよ！！」

「多分飛べます。」

「多分？」

司令官が意地悪そうにアマネを見る。

「飛べます。」

「わかった。わからないことがあったら班長に聞くんだぞ。」

アマネが俺のほつをチラッとみたのがわかった。

「わかりました。」

「場所はオペレートさせる、行って来い！」

「了解！」

~~~~~

「エレベーター？」

俺たちは司令室を出て、近くのエレベーターをボタンをおして待っていた。

「あ、そっか言ってなかったっけ。ポゼッションは指令が出たときは、基本的に現地まで自分達で飛んでいくんだ。そのとき地面から飛ぶのもあれだからってことで、屋上から行くんだ。」

「そう。」

ポーン。

「行くよ。」

BDBのエレベーターは全部ガラス張りです。外が良く見えるようになっていて、

眺めが良くて俺は結構好きだ。

高所恐怖症の人には耐えられないらしいが。

外を見ていると、ガラスに映ったアマネが目に入った。

震えている？

「アマネ？」

「何？」

「もしかして高所恐怖症？」

「高いところスキ。」

「じゃあ、何か不安？」

アマネは凶星だったのだろうか、それが少し顔に出た。

「な…なんで？」

「震えてる。」

俺はアマネの足を指差していった。

「…ちよつと怖い。」

『お前怖くないの?』

『何で?』

あの時、アマネは怖くないとは言っていなかった。

そりゃ、いきなり悪魔が〜とか言われたら誰でもびびるよな。

「大丈夫。」

「え?」

「大丈夫だよ、きっと。」

そのとき、俺は始めてみた。

「そうね」

アマネが笑っているところを。

テレビでもまったく見たことが無いアマネの笑顔。

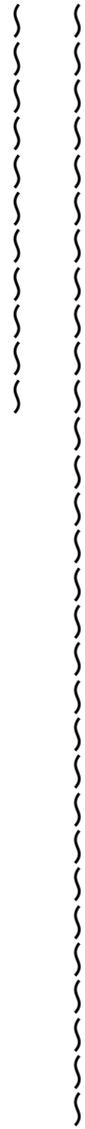
エレベーターが屋上に到着した。

「行くっ。」

俺はアマネに手を伸ばした。

アマネはその手をぎゅっとつかんだ。

「うん。」



時雨陽蝶しぐれがへる (16)

ランク SS

契約蝶 カゲロウ

能力 剣

歌代亜蝶うたしろあまね (16)

ランク S

契約蝶 アゲハ

能力 歌

4班、班員の相性 SSS (最高ランク)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2860z/>

蝶憑き 聞こえない歌

2011年12月10日01時48分発行